

壹尺四寸直くして艦先とがり如劔一枚柅タテにしてよことも也大船なれども板薄くしてよく淺川を行

〔京都御役所向大概覺書三〕大和河内國境龜瀨川劔先舟之事

一大和河内國境龜瀨川劔先舟之儀元祿十丑年被仰付御代官萬年長十郎支配ニ而御運上立野村總百姓共毎年銀百五拾枚宛右御代官取立上納致シ候處正徳二辰年右村龍田明神社士願ニ付總百姓運上御免社士喜左衛門と申ものニ舟支配被仰付正徳三巳年より御運上相止申候

〔堀川後度狂歌集六〕船

殿守

神風のいせの downward も乗合につむやはらひの劔先の舟

〔和漢船用集六〕

河海江湖獵船

トモフト

丹後の國よさの海にあり或はトモウチと云又カナチと

よぶかなちとはかながしらのことをいへり其船おもてのかたちかながしらの魚に似たるを以云成べし又舟のとも平たく大也是によつて船太と呼小舟也

〔甲子夜話三十〕

西歸ニ木曾ヲ經シガカケハシノ下ノ流急ニシテ漲ル水ハ白ヲ曳ケリ其流ニ樵

夫アナタノ山ニ渡ル小舟アリ其形イカダノ如クヤウヤク一二人ヲ容ルベシ名ヲカラトイフ

予浦清思

○松

思ヘラクカラハ甲ナリ木實ノ甲龜ノ甲人ノ甲冑

○註

略 ナド皆是ナリ此舟ヲ甲ト云モオ

ノヅカラ古言トゾ聞ヘシ

〔紫の一本下〕船

蛭きりくす 是は二挺立の舟に小さき覆ひをまたる船を云ふ吉原の通ひ船なり遺佚が云ふ此の舟を蛭きりくすと云ふはおほひ小さく乗るにも出るにも四つばひにして出入すぐらりとふれうごきて今水に入るかノと思へばあぶなきばかりにて面白き事も遊山も何もかもなくなる故に